

暗まぎれ

泉鏡花作

一

神田明神坂を下りる處、其中坂の唯ある路地口に、半紙二つ切で、（此奥に見はらし貸家あり）と貼つた木戸がある。覗くと路地の突あたりに白壁が見えて、柳の樹が一本、格子戸の中に植わつて居るが其家ではない。右側に、空地で總井戸がある。井戸の筋向ひ、即ち路地の左側の三軒目。三尺の靴脱を上ると三疊と四疊半二室の長屋で、三疊には小道具の一つなく、紙の切れも散つては居らない、疊も冷たさうで片附いたものである。

次の四疊半に長火鉢が一個据ゑてあるが、火の氣はなく、灰をならして綺麗にした、火箸が眞直に立つて、鐵瓶がキッチンと乗つて居る。

まだ灯も點さないから、晩方で薄暗く、通の坂を、俵、荷車の音で騒がしい中に、冴えた豆腐屋の響も響いたが、一時靜になつて、千代や、千代や、と夕餉に小兒を呼ぶ長屋内の女房の聲がする。

室の内は寂漠して、疊の縁も消えさうになつた、人が居ないのかと思ふと、勝手にガタンといふ音。がら／＼と引窓を引いて開けると、生白い光線がさして、障子がばつと明るくなつた。

すねたといふ身で、ぐいと綱を引張つた、束髪の、鼻筋の通つた、險のある、凄いなは、一文字の眉を擧めて、まばゆさうに引窓から空模様を覗いたが、投げたやうにぱつたり踞つて、背向になつて、竈に向ひ、二三本突込んである薪をござ／＼邪険に引摺んで、二三度力強く小突いたが、肩を揺つて、うごき泣といふのであらう、響は立てないが身ぶるひをして、じれつたさうに頭をふつた。

「しやうがないね！」

婦人はツンとして竈の前を開いて立ち、手にあつた早附木の箱を棄てるやうにたゞきつけて丈高い身で障子をあげたが、

するりと四疊半へ入ると、後手でぴつしやり。

其まゝばた／＼と手觸荒く、襖の戸をあけたてしたが、やがて、ひっそりとし人の居る氣勢もしなくなる。

「寒い、寒い、おゝ、寒い。」

ほつといふ呼吸をついて、勝手の手戸へつかまつて、忙しさうにあげて入つたのは少い男で、羽織も着ない、痩せぎすな身体に綿入を着て褌を襲ね、白木綿の帯を占めて、片手に一足の足駄をぶら提げて居た。緒が切れたのであらう、跣足の、雨上りの泥濘で泥だらけになつて、裾は端折らないで手で掴みあげて居たが、土間へ足駄を投げ出して、がっかりしたやうに腰をかける。

いま開けて去つた明窓から、薄い冬の西日がさして、一條臺所に煙のやうな塵埃が立つて、下流は乾いて居る。若い男は足を爪立てながら、腰掛けたまゝで四邊を見たが、雑巾を取つて、ぐいと拭いて、板の間へ上ると、

「おゝ、寒い、寒い。」とまた身震をして、内懐から手を入れて、衣服の下前を引張り合せ、裾を下して、襟を繕ひ、立つて障子に面したが、しばらく猶豫つて、やがて靜に開けた。

婦人は薄暗い一室の片隅に、押入を背後にして、何うしたわけか、長火鉢を少し離れて、横へ、身を固く坐つてたが、薄汚い搔卷を深々と引懸けて、肩を竦め、襟をば頤の下へしつかりしめ合せて俯向いて居る。寒いのであらうけれど、何か力ない風、身繕ひをする元氣もないらしい、取亂した繕はぬ居住居で、棄身の形。

其の憂慮はしさうな、憤つたやうな、口惜いやうな、妙にまゝならないといふやうな、たとへば縛られて居るやうな姿を見て、

「唯今、」と少い男はいつたが、危ぶんで聲を掛けたらしい、控目な挨拶だつた。

婦人は振向いて見ようとせず、黙つて、暗い中に俯向いて居る。

いまゝで恚やうな現象は、此少い男が、都合あつて此内の次の室に、厄介になつて、夜は寝かして貰ふやうになつてから、二月、彼是、三月近くも経つが、此晩がはじめてゞ。何時婦人の方から、

「おや、作さんお歸りかい。」と口軽にいつて、「さあ、」といふので、長火鉢の向うへー亭主の居ない時はー招じてくれる習である。殊に今日は寒いのに、足駄の緒を切して歸つたのに、何ともいつてくれないのは、何うしたわけであらう。

見ると火鉢には火の氣がない。病氣なら寝てさうなものだ、頭痛持でもない婦人と、さう思つて、變だな。

少い男は悄げたやうに、間を置いて、火鉢の隅の方へ横ずわりに坐つたが、チヨツと出して翳して見た手を、極悪く其火のない火鉢から引込ませて、拱いて、

「何うかして？ え、松さん、何んな事があつたんですか。」

手で其婦人の身體に觸りでもするか如く、大概遠慮深く聞いて見たが、矢張黙つてゝ、極めて接穂がない。

一體こんな間柄ではないのであるから、差あたり、恰もがらりと他國へ行つて、變つた海を見るやうな思がする。

少い男はやゝしばらく身體を持あつかひ、頬杖をついても見たり、額に掌をあてゝも見たり、それも變になつて、あつちこつち見當もなしに三したが、フト氣が着いたので、

「あゝ、あの燈明でも灯けませうか。ねえ、ちよつと。」

婦人はやがて重たさうに頭をあげた。前歯で銜へてた搔卷の襟を放して、ぱつちり、清しい、ものをいふ、うるほつた、黒眼勝なのを二いて、屈託らしい、心細げな、件の若いのに、顔をぎつと見て、またうつむいて、歯で再び襟を噛んだ。

此方は、ともかくも自分がいつたことに、仕打でばかりも應じられたので、こゝを取附島とすかさず、

「ねえ、つけませう。」と、うるたへたやうな早口である。

「可ござんすよ。」とはつきり言つたが、のみこんだ、察してる、お前さんが私の様子を、心配するのは知つてますといふ意が籠つて、聞えたから。

これに力を得て、今度はおど／＼しも何にもしないで、

「何故、え、松さん、何うしたんです。」と詰るが如く質問し得た。

別に答ふるといふでもなく、投げた調子で、

「燈明をつけたつて、何うせ、分りやしない。誰の家だか知れもしないものを。」

それでも、聞かせないつもりで言つたのでもないらしくつた。

「何うしたんです。をかしいぢやありませんか。松さん、一體何うしたといふんですね。」

「何うしたつて、ね、お前さん。」

と、松は搔卷を引占めたまゝ膝でずり出して、

「大抵積つても御覽なさいな、馬鹿々々しい。」

といひながら銜と寄つて、廣袖の中から、細く、綺麗で、眞白な指のさきを纒に出して、いきなり、急激に、作の膝を軽く叩いたが、

「ねえ、お前さん。」

といつて、顔を見て、莞爾笑つた。が、また、ほゝゝと笑ひ返して、

「私は何だつて、お前さんの方で断りますわ。」

いふが疾いか、松は作に突懸けてた身を翻して、ぐるりと膝でまはつて、長火鉢の向うへ避けた。身體のあふりに搔卷がうしろへはづれて、襟のあいた胸は雪のやうである。清らかな額にかゝつた、ほつれ毛は艶かに極めて黒い。

「ねえ、作さん。」
と其まゝ語をついで、

「さうぢやありませんか。串戯ぢやあない。私はね、ひどく買被られて、ぐつと、いろしになりましたよ。何處にかねえ、こんな風で、粉米だ、はかり炭だ、やれ、薪ざつぼうの小買だの、朝御飯は寢坊で抜、お晝はお蕎麥で済したが、晩のは何うするなんてつてるのに、其處どころなもんですか。のんきなものさ。それでも小いるの——つや二つは稼ぐんだと思はれたから難有いね。聞いておくんなさい、まあ、斯うさ。ね、御迷惑だらうけれど私や本望だよ。良人のがねえ、けふ、私が一人で居る時、いつになく溢くつて、いやにあらたまつて、いふにあや、作さん、お前さんと私が何だつさ、あやしいつさ。」

といひかけて、勤めたらしいわらひ顔、一寸作さんの顔を見たが、もう暗くなつて其時の男の色は得見えなかつた。けれども推するに難からずであつたらう。

「心配をしなくつても可いよ、串戯はよして、お前さん、飛んだことぢやあないか。疑ぐるつたつてほどがありますわ、ねえ、私や良人のはともかくもお前さんには濟みません。

腹が立つたから此方も小強くいひかへしてやつたけれども、餘程一疑つたと見えて、酷く眞剣で怒つて居たのよ。

あゝだ、かうだつて、何か、一々ならべたがね、そら、お前さんも覺えて居るでせう。此間の朝、良人の、朋友のアノ鳥井が来て居た時、お前様は寝て居たつけね。

良人と鳥井とはさきへ御飯を食へた處へ、お前さんが起きたでせう。珍しくお冷が残つてたし、私はまだ食へないで居て、おじやに拵へて居たから、お前さんは風邪を引いておいでだった。丁ど可からうと思つたので、直ぐお前さんが食がらうとしたのを留めて、

（待つて在らつしやいよ、可いものが出るから、あとで一所に食べますから）つて私が左様いつたのね。詰らない、そんなことまで十八ヶ條の中へ入れてあるのさ。

（作さんは何だ、そりや遠い縁續きぢやあらうけれど、言つて見りや、食客ぢやあないか。其に君の處の細君の、あの様子つたらない。何だ、待つて入らつしやいよ、いまにいゝものが出るから一所に食へませう、とは何うしたこつた。主人の居る前で、しかも其主人の別懇だといふ己も傍に居る前ぢやあないか。人を馬鹿にした、踏つけた。亂暴だ。）つて鳥井がさ、内の赤くなつて然ういつたんだつてね。

（まだそんなことばかりぢやあない、君が留守の處へ僕が訪ねて行つて、御免下さいといふと、返事ばかりして、一寸は出てこないことも、一度や、二度のことぢやあ無い、それで出て來ると何うだ、何だかばたくさして、今帯を占めて起ちましたといふ様子も見えただやあないか、疑つて見りや縁の下へ、二歳の下駄を忍ばしてあるつていつたつて、争はれやしなぢやあないか。其時は別に疑ひもせなんだが、今になつて見りや、いづれ目のつけ處だ。）つてそんなこともいつたさうなり、そりや、眞個覺があるのよ。蜘蛛がね、頸から這込んだことがあつて、晩方さ。」

「単衣もので身輕ぢやあつたし、むず／＼するから吃驚して、もう氣でも違ひさうになつて、帯を解いて、引拂つてた處へ、ちやうどあの鳥井が、其の、御免なさい一件でね。」

だもんだから、あわてゝ、そんな風を見られたんだらうと考へるわ。

それからまださ、此間、お前さん、鳥井の内へ行つた時、白銅の入つてた蝦蟆口を忘れて出たとね、ねえ、作ぢやん。」

「あゝ。」といった作は、其まゝでものも得いはないで居たのであるが、唯一言應じたばかりで、續いては言はないでちつと沈んで居る。

「そして何だつていふぢやありませんか。途中で引返して取りに戻つたつて、ね、左様でせう。」
と念を入れて、

「お前様は何の氣も着かないんだけれど、まあ、人の悪い。其をね、まだお前さんの手に返さないさきに、そつと中を見たら人があると、作さん、然うお思ひ！ 鳥井の細君さ。角ね、あの、それ私が舊大變に世話をして、まあ、大分恩に被せても可い、あの角が、私の手から知己づくで、丁ど鳥井の細君がぶら／＼してるからつていふので、世話をして、女中代といふやうな譯でやつてあるがね、其が、まあ、最初見つけ出したんだつて、

（あら、誰方んだか、財布が）つて拾つたら、お見せ、といふので、細君が取つて、角と二人であけて見たつてね。二十錢ばかり入つて居たとね。お前さんは何んなに困つて居なすつても、月に一度づゝは少なくなつても郷里へ手紙を出すんだつて、何にもつかはないで持つてるでせう、そんな心掛で居なざるもの、如何困つたつて、私は一錢でも借りようとはしないで居たわ。良人はちつとも知らないお金子さ。お金子だつて何二十錢ぼつち。だけでもね、お恥かしいけれど此頃ぢやあ、ちよつと湯銭にだつて困つてますわ。

其を鳥井ぢやあ知つてるから、（おや！ 三澤さんに居る作さんのだが、何うしてこんなにお小遣をば持つてるだらう。）
つて、鳥井のかみさんが然ういつたとね。

（分つてます、そりやあのお松さんが持たせて置くのでせう。旦那は道樂のあとで、あんなに困つてますけれど、お松さんは實家が可いだから、彼でも母親の處から内證で幾干かづゝ月不自由はしない位にして送つて來ますが、一體馴染添で、お松さんの親御達は今の旦那と一所に居るのが大の不得心なんで、綱でも帯に結へとかうといふのを、振り切つて逃げて來て、東京であんなことをしてるのですから、おもて向はかまひつけないやうにしてありますが、人情ですもの。困るといや、もと／＼ありあまる身代ですから、そんなにしちやあ、そつと附届けがありますので、はじめの内はそのお金子を出しちやあ、旦那の喜ぶのを見て御自分でも喜んで居なすつたんですが、あゝ、やつて、他に可愛いのが出來ちやあ何うして其を出さずか。そつと秘しといて、まあ、それ作さんの小遣にもしたり、衣服だつて、拵へて、秘して、髪結處に預けてあります。内に居ちやあ、わざつと束ねがみか、なんかで、くすぶつて居て、一寸々々出掛けちやあ、それ、髪を結つて、其處で一枚りうと仕立つて、用意の可さといつたら、新しい、吾妻下駄まで調べてあつて、ずつと拵へて出ると、作さんを路地裏か何かへまはして、ばつたりといふ詭になつて居ます。で何處へかお入といふ寸法でせう。

角は、あのお松さんには小さい時から大變お世話になつて、お主とも、姉さんとも思つてましたけれど、も、そんな心掛の方は愛想が盡きました。今ぢやあ御昨今だけれど、旦那様の方がおいとしい、二歳も二歳だ、小生意氣な。つてさういつたとさ。作さん、口惜いぢやあないか、阿魔、しどいから。」といった聲は鋭かつた。

「作さん心配をしないで可いよ、まあ、しかし聞いて下さい。

それでさ、お前さんは何にも氣がつかないでおいでだらうけれど、蝦蟆口を取りに歸つて、向うで、渡す時、
 (大分工面が可いね、おおごんなさい。) てつて、さういつて、皆がニタ／＼したでせう。む、さうだつて、皆其氣で、
 後指を指したんさ。丁ど鳥井も居たらうね、あゝ、さうだらうね。

それでね、角がそんなことをいつたつてことも、矢張鳥井が十八ヶ條の中に入れて、良人のに談したんだつて、けふ、さ
 つき良人が私に突かゝつた時然ういつたんだよ。

何でもねえ、此間から、鳥井が來ちやあ、良人を一寸々引張り出して、お前さんと私とがさしむかひになるやうに留守
 さしちや、何處かへ出て行くのを、大方工面にも出懸けるのだらうとばかり思つてたが、さうぢやあ無かつたの。

(昨夜、再昨の晩と二晩續けて、何處も何だから天麩羅屋へ上らうぢやあなし、明神様の中を行つたり、來たり、石燈籠
 の間だの、唐獅子の前後を、ぐる／＼廻つて。) だつて、立つてちや寒いわ。」

松は幽に笑つた。

「ねえ、御苦勞様ぢやあないか。鳥井がしみ／＼親身になつて、あの、何だつけね、意見でもなし、諫めるのでなし、愚
 痴でもなく、朋友づくでそれ、あゝ、然う、其忠告とやらをしたんだつて。

さつきも良人がいふのにや、
 (何、そりや、我だつて道樂もしたものだ。詰らないじんすけなんぞいふ氣はないが、それぢや、手前あんまりな仕方ぢや
 かないか。下女風情のお角にまで、あの方は可哀相だ、な、下女に可哀相だといはれるやうぢやあ、我だつて黙つちやあ居
 られない、自分は大きつぱで、呉れてやるを極めるにしたつて、極をつけないぢや、鳥井にだつて、顔が合されない。)
 つて然ういふぢやあないか、串戯にして笑つて居られるやうな剣幕ぢやないんだもの。

(いゝえ、そんなことを言はれちや、あかしを立てるより、言譯をするより、まあ、私の方で、黙つてばかり居られませんか。濟されやしないから、そんな、そんなことをいつた鳥井と、お角とを並べて下さい。お前さんの前で立派にいふことをいひますから。)

然ういふとね。

(松、あまり大な口を利かない方が可い、そりや鳥井にも立會つてもらはう。お角も引張つて来るが、覺があることなら大びらにしないが可からう。我もまさかとは思つたけれど、まんざら形のないことぢやああるまい。つて嫌な顔をしていつたんだがね。)

—————

今にして思へば、鳥井に然る嫌なことをいはれたので、良人もくさ／＼して堪らなかつたからであらう、知らないさきは何にも氣が着かなかつた。

昨夜は餘所から歸りがけに、珍しく酒屋のご用を掴んで入つた。舊から酒呑ではあるけれど、多日窮迫のために餘儀なくされて居たので、其かはり羽織は脱いで来た。松はけふ此頃の場合なのに、と然う思つたので、あまり可い顔はしないで居ると、獨で爛をして、黙つてじろ／＼顔を見て居たが、猪口を取つて獨酌の構で、キツと眼をつける。松は長火鉢の向うに手を翳して、あたるでもなく、両手をもいだやうに懷つて、ふるへさうに寒がつて居た。

(餘所の内ぢやあな、こんな時にや酌をしてくれるんだよ、)と淋しく笑つて、ものを含むやうに良人はいつた。

(だから、餘所へ行つて酌しておもらひなさいな。おゝ寒。)といつて横になつて、一度入つて居たのを、起きて出迎へた、傍の夜具の中へころげ込むやうになつて、くるりと背後を向いてしまつたのである。

良人は流眄にかけてぞつと見たが、ぐつと手酌で引懸けて、隣の室にこれを見ながら、煎餅蒲團にくるまつて居た、作を見返つて、

(女房にまでかうされりや、君なら何うする處だね。)

と何の事もなげに、十ばかり年紀上の男に笑ひながら聞かれたので、作は別にいふこともなかつたから、唯莞爾した。

この莞爾も、良人の目には何んなだつたらう。

却説、お松のいふには――
「だからね、そりやをかしいと思つたらうさ。ねえ作さん。だけでも私等に何かさういふ氣があつたんぢやあなし、まつたく心持よく酔はせてやらなかつたのは悪かつたけれど、そりや良人だつて、些少は察して呉れるが可い。

こんなしがないうちで羽織をなくしてまで飲むのかと思や、わけは知らないもの、誰だつて可い心持はしまいぢやないかね。

それも高砂、野の宮で、萬事お媒妁まかせの、よろしく遊ばしませでもつて、お嫁人となつたわけぢやあなし、何でも知り切つてゝ、はじめて逢つた晩、夜中に目を覺して

(あゝ、うと／＼して可い夢を見た。) つていふから、(もし、何んなのを見たの。) と此方は未だ恥かしくつて尋常さ。

(奴のよ、おいらんの夢をよ、) といつて、平氣で居た人ぢやないの。いまめかしい、いたづらも何もあるもんかね。でもさ、疑はれちやあ、そりや、まつたくだ。良人も顔は立つまいし、私だつて黙つちやあ居られないから、何でも、何でも可いから、鳥井とお角に、お前さんの前であひませうつて、然ういつたもんだから、それぢや、まあ、ともかくも一度話して来よう。最も其のむかうぢや、お松さんの前で立派にいつて見せる。殊に困りや證人もあるといふことだから、其つもりでね、お前、後悔をしないやうに。) と私にいつて出て行つたんだから、もう歸つて来るだらう。證人だつて、お角に違ひないやね。畜生、もし然うなら飼犬に手をかまれるてえんだ。たゞは置かないから。作さん、あのう、お前さんは、

些もお案じぢやあないよ。」と、松があとの言は、大に穩かになつて、却て、自分が人を慰めるやうな語氣であつた。

「え、もう笑ごとです、些少何かと思ひましたが、詰らない。しかし餘り意外ぢやありませんか。」

「意外も、案外も。お！ そりやあ、さうと。」

と、かういつた時、二人は目を合せたが、齊しく四の眼で天井を仰いだ。眞闇である。

「松さん、燈明を。」

「左様ね。」

「暗くつてこんなにして、居ちや。」

「何うせ何だと思つたけれど。」

「また疑られるたねでせうから。」

「いやなこつた。」

といひ合せたやうに、二人は手さぐりで身を起した。一人は洋燈を、一人は早附木を、と齊しく立つて分れたトタンに、

突外すやうなけたましまさ！ 格子戸をあけてばた／＼と駈け込む音。暗がりだから、ぎよつとして、思はず片隅へ身を竦

める、

「御新姐様々々。」と息せいてあわたゞしい、女の聲。

「お角！」と震へ聲で松は鋭くいつた。

「あ、あれ、御新姐様、眞闇ですね。」

「眞闇も何もあるか、畜生、汝は、汝は何だつて、畜生。」と、激した口は思ふことのかばかりをも言ひ得ない、聞く

と早やバツタリ其處へひれ伏した氣勢で、

「え、え、畜生、獣でも、鬼でも、人でなしでも、私、私は何でも可うございますから、鬼でも、蛇でも、畜生でも、

何にでもなりますから、可うございますから、御新姐様、可うございますから、御恩は忘れやしませんから、何でも可うご

ざいますから早くお遁げ遊ばせ。大、大、大變でございます。とも角もお遁げなすつて、向うぢや、大騒ぎをやつて今に参ります。もう來ますよ。旦那も鳥井も飛んだことを仕出來しますから、御新姐様けんのんでございます。作さんもお少い方、何だつて構ひません、あとでまた何うともなるのでございませうから、あれ、もう斯ういつてます内に参りますと下可ません、私をお怨み遊ばしても可うございます、私は何うでも構ひません。」

「角！ 角！ お角！」と松はおる／＼聲になつて來た。淺からぬ縁のある角がいふことなんだもの。

「あれさ、早く、旦那はのぼせたんですから何んなことしようも知れません。後生ですから早くお遁げなすつて下さい。あれさ早く。」と、これもおる／＼聲である。暗まぎれをとつばくさと、人の立迷ふけはひがしたが、勝手の戸が、かたりと開いて、夢中で路地口を一明神坂RT>みやうじんざかの方へ出て去つた二人の跽音がした。

二月ばかり經つて、松と作との潜んで居る所在が知れた。仔細も又残らず知れた。

といふのは松の世話で、角は鳥井の細君といふのに使はれることになつたのであるが、この鳥井の細君といふのがむづかしい、嫉妬深い、だんまり坊で、口輕な角は、始終其傍に置かれながら、多くしゃべることの出來ない苦しませに、何か、何かと心懸けて、氣に入らうと勤めて居る内、詰らぬ所へ伶俐なもんだから、いつも、うつくしい、きれいだ、惜いものだ、あんなのはまたとあるまいと、鳥井が口癖のやうにいつて聞かす松を、悪口することが、其細君には何より喜ばれることを發見したので、遂には口ばかりでは濟まなくなつた。で、事が起ると、辻褄が合はなくなり、角は證人に立たねはならない、立てば實情を發見されて、何んな目に合はうやらと、苦しませに、先を取つて、威しつけて、うつくしい女と、優しい男とを犠牲にしたのであつた。が、これが知れ、また二人の潔白だつたのが知れた時分になると、ほんとに男女とも

*
*
*
*
*
*
*
*
*

【完】